

「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた(マタイ 9:35)」。どの町の会堂でも福音を語り、どの村にもいる病人を癒しながら、イエスは弟子たちとぶらぶら旅をしていた。

病は悪霊の仕業、ケガレが伝染せぬよう「ソーシャルディスタンス」が強制され、人間関係が壊された。イエスは人間のつながりをも癒して、「神の御国」の到来を示した。

「また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた(9:36)」。こちらは病者ではなく群衆。おびただしい群衆と一定数の病者。想像すると、コロナ感染に委縮した現代と二重写しに思える。

今、世界は、感染の収束が見通せない不安に覆われている。あの時も今も、人々は「飼い主のいない羊のように弱り果てている」。そんな中にポツリポツリ、癒しの光が灯された。福音を宣べ伝えていても、教会にはイエスがなされたような病の癒しは無理なのか。

イエスは弟子たちに命ずる。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい(9:37~38)」。

「収穫は多い」を「伝道の好機」、と誤読してはならない。文脈通りそのまま聞いたら、収穫とは、群衆の不安であり、一定数いる病者のことではないか。

打ちひしがれた人々は、「収穫の主」である神のものなのだ。ゆえに愛の対象であり、イエスの「深い憐れみ(9:36)」が注がれた。「愛を受ける器」にむけて、憐れみが注がれることを注視したい。

弟子たちは「働き手になれ」と言われたのではない。「働き手を送ってくださるように願え」と命じられたのだ。それを実際に実行なさるのは、収穫の主である神。

それでは働き手とは誰のことか。コロナ感染が広がった今日の働き手とは、医療や福祉の関係者か、行政や政治に携わる者か。教会は其中で重要な働きを担う。

イエスは「御国の福音を宣べ伝えた」が、これは具体的に私たちの仕事だ。収穫のために、収穫の主に祈る(9:38)。祈りこそが、力の中心、真の希望であることを世に証しする。

ただ勘違いしないほしい。教会が祈り、病院が治療し、行政が整える、という役割分担すればそれでよし、ではない。福音の告知と癒しは、イエスにおいて一つの業であるからだ(9:35)。祈りと癒しの業は別々ではない。さまざまな形が想定できるが、私たちは神の業すべてに仕えていく。

イエスは弱り果てた者たちを「深く憐れまれた(9:36)」。力や金と無縁な神の収穫を深く憐れんだことが、世の支配原理と軋轢を起こし、十字架を引き寄せた。今もなお、愛し、祈るところに摩擦は起こる。

「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない(詩編 23:1)」。神が羊飼い、私が羊。イエスは「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる(ヨハネ 10:11)」と言ったが、主とはこんな羊飼いなのだ。私たち羊は、一人ひとり名を呼ばれるほどに愛され(10:3)、何も欠けることがない。

「死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける(詩編 23:4)」。主なる羊飼いに従う道では「死の陰の谷」に滑落せず、試練も私の力となろう。それほどまでに私は、深く憐れまれている(マタイ 9:36)。

すなわち私は、弟子であるより以前に、一人の病者であり、打ちひしがれた群衆の一人にほかならない(9:36)。



《おまけのひとこと》

健康で不安なき者は 弟子の足場でこれを読むだろう(マタイ 9:35~38) そんな表層にいて満足なのか 病や不安を抱えた者の足場は違う 病と不安は聖書をも深める イエスに深く憐れまれた者の恵み